和光保育園建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

# 富　樫　館　跡　V

2011

石川県野々市町教育委員会

和光保育園建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

# 富　樫　館　跡　V

２０１１

石川県野々市町教育委員会

# 例　言

1　本書は、富樫館跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は、石川県石川郡野々市町扇が丘地内である。

3　調査原因は和光保育園建設に伴うものである。

4　調査にかかる費用は、社会福祉法人和光会が負担した。

5　調査は、社会福祉法人和光会からの依頼を受けて野々市町教育委員会が実施した。

6　調査は、平成22年度に実施した。遺跡名・面積・期間・調査体制は下記のとおりである。

遺跡名　富樫館跡
面　積　797㎡
期　間　平成22年5月6日～平成22年6月18日
調査主体　野々市町教育委員会（教育長　村上維喜）
担当課　野々市町教育委員会　文化振興課（課長　山下真弓）
調査担当　永野勝章（野々市町教育委員会文化課　主査）
整理・報告書作成作業
担　当　永野勝章
　　増山明美（野々市町教育委員会　臨時職員）

7　本書についての凡例は下記のとおりである。

(1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。

(2) 水平基準は海抜高であり、T．P．（東京湾平均海面標高）による。

(3) 出土遺物番号は、遺跡ごとに本文・観察表・挿図・写真で対応する。

(4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。

8　調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保管・管理している。

# 目　次

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 5
　第１節　層序 …… 5
　第２節　遺構と遺物 …… 5
　　(1) 古代以前　(2) 中近世
第４章　総括 …… 7
遺物観察表 …… 8
図面図版　遺構・遺物実測図 …… 9～17
写真図版 …… 19

# 第1章　経　過

## 第1節　調査の経過

本書に収録する富樫館跡発掘調査は和光保育園建設に伴うものである。

平成22年2月1日、社会福祉法人和光会（以下、和光会）から野々市町教育委員会（以下、町教育委員会）に対して野々市町扇が丘37番1号、38番1号について保育園を建設するための農地転用予定地の埋蔵文化財について調査依頼があった。町教育委員会では対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地内（富樫館跡）であることから2月10日に試掘確認調査を実施した。その結果小穴や溝状の遺構を確認したため、和光会に対して対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地内であると回答した。

これによって和光会と野々市町教育委員会との間で、当該地における保育園建設について協議がなされ、建設工事によって地下の遺跡に影響の及ぶ建物と遊具部分について発掘調査を行うことで合意した。3月8日に和光会より文化財保護法第93条第1項の規程による土木工事等のための発掘届が町教育委員会に提出された。町教育委員会では建設工事によって地下の遺跡に影響の及ぶ範囲については発掘調査を行うとの意見を付して石川県教育委員会（以下、県教育委員会）に進達し、3月16日県教育委員会より発掘調査を実施する旨の通知があった。平成22年4月20日、和光会より発掘調査依頼が提出され、同日和光会と町教育委員会の間で埋蔵文化財発掘調査の契約が締結された。

## 第2節　発掘作業の経過

5月　6日　調査範囲設定。
5月10日　重機による掘削開始。
5月14日　作業員による発掘調査開始。
5月17日　遺構検出。
5月18日　調査区西側の河道跡トレンチ掘削開始。
5月25日　調査区東側の各遺構掘削。
5月26日　河道跡掘削開始。
6月15日　航測。
6月18日　機材搬出。調査終了。

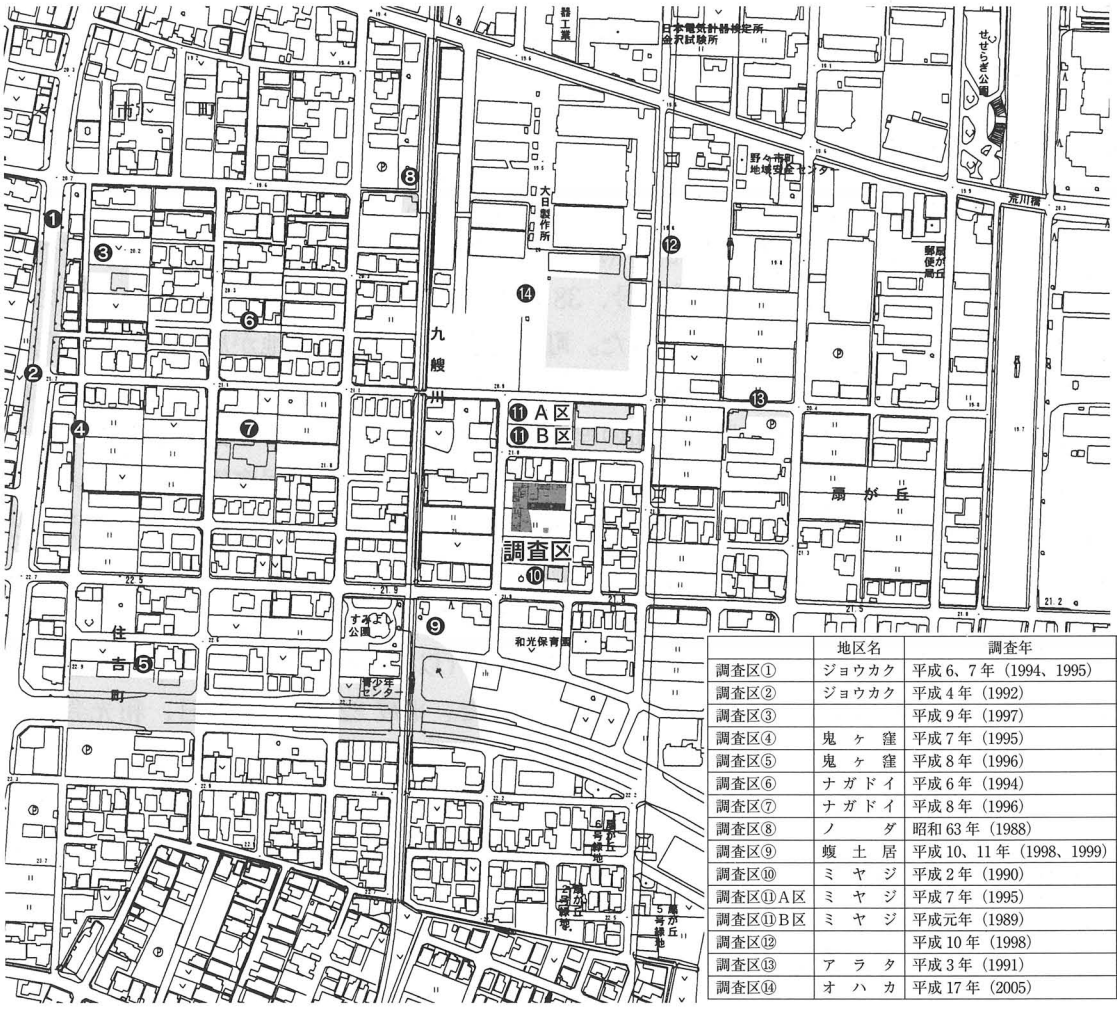
## 第3節　整理作業・報告書作成

整理作業及び報告書作成は平成23年2・3月に実施した。

# 第2章　位置と環境

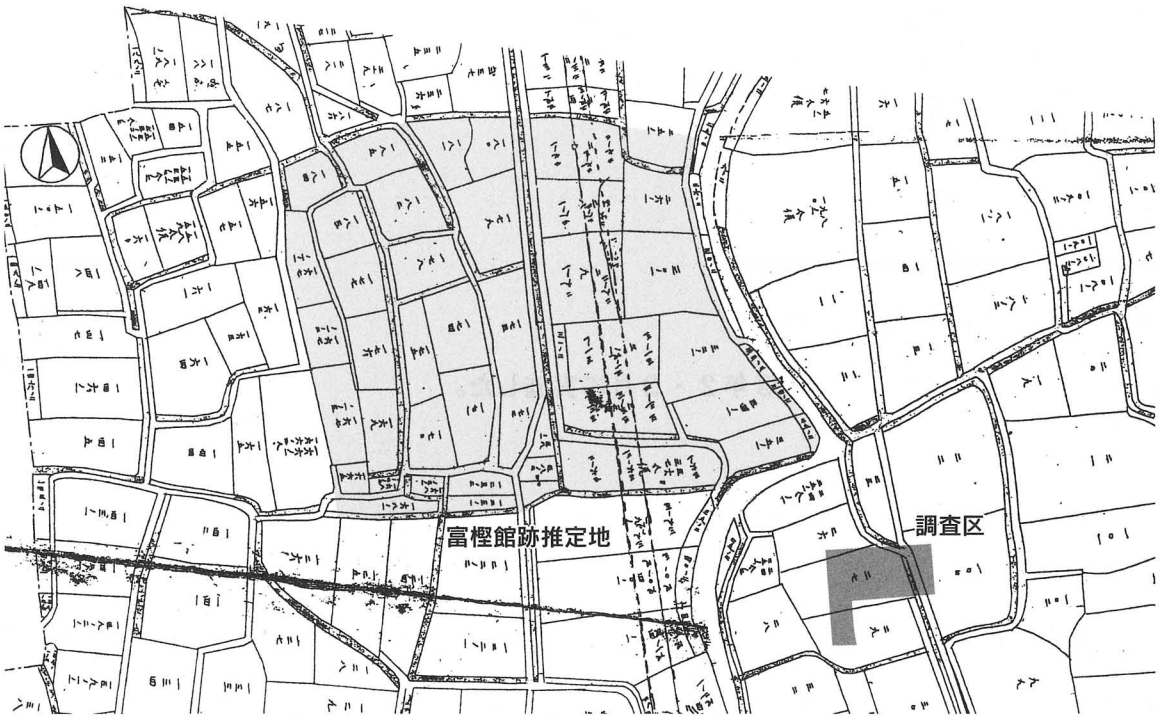
## 第1節　地理的環境

野々市町は、石川県のほぼ中央に位置する。北東は金沢市、南西は白山市に隣接している。町の規模は東西約4.5km、南北約6.7km、面積は約13.56kmである。本書で報告する富樫館跡は野々市町の




| | 地区名 | 調査年 | 面積(㎡) |
|---|---|---|---|
| 調査区① | ジョウカク | 平成6、7年（1994、1995） | 1,800 |
| 調査区② | ジョウカク | 平成4年（1992） | 35 |
| 調査区③ | | 平成9年（1997） | 220 |
| 調査区④ | 鬼ヶ窪 | 平成7年（1995） | 300 |
| 調査区⑤ | 鬼ヶ窪 | 平成8年（1996） | 2,300 |
| 調査区⑥ | ナガドイ | 平成6年（1994） | 600 |
| 調査区⑦ | ナガドイ | 平成8年（1996） | 960 |
| 調査区⑧ | ノダ | 昭和63年（1988） | 150 |
| 調査区⑨ | 蝮土居 | 平成10、11年（1998、1999） | 3,570 |
| 調査区⑩ | ミヤジ | 平成2年（1990） | 90 |
| 調査区⑪A区 | ミヤジ | 平成7年（1995） | 300 |
| 調査区⑪B区 | ミヤジ | 平成元年（1989） | 600 |
| 調査区⑫ | | 平成10年（1998） | 300 |
| 調査区⑬ | アラタ | 平成3年（1991） | 200 |
| 調査区⑭ | オハカ | 平成17年（2005） | 2,680 |

第1図　調査区位置図（S=1/5,000）




第2図　「野々市町字本町宅地見取図」（S=1/2500）

東部にあたる扇が丘地内に所在する。このあたりは標高約 20m、手取川扇状地に立地し、現況は宅地・商業地・水田の広がる平坦な地形であるが、これは近代初頭に行われた耕地整理と近現代の土地開発によるもので、それ以前は手取川とその支流によって形成された細長い島状の微高地が点在し、その微高地上に集落が展開してきたことが近年の発掘調査で明らかになってきている。

## 第２節　歴史的環境

野々市町おける人々の営みは縄文時代に遡る。御経塚遺跡は縄文時代後・晩期の北陸を代表する大集落跡であり、その周辺には金沢市のチカモリ遺跡や中屋遺跡等も所在する。この辺りは手取川扇状地東北端部に位置し標高は 10m 前後で、扇状地を伏流する地下水の湧水域である。

弥生時代前・中期の集落跡は当地域ではほとんど確認されていない。しかし後期になると御経塚遺跡･押野タチナカ遺跡など町域北部に位置する御経塚地区と押野地区に大規模な集落跡が現れるほか、高橋川流域の自然堤防上を中心に高橋セボネ遺跡などの小規模な集落跡が分布する。

古墳時代前期に入ると遺跡数は減少する。町域北部に所在する御経塚シンデン古墳群や二日市イシバチ遺跡では前期の古墳が発見されているが集落の規模は小さく存続期間も短い。しかし７世紀に入るとこれまで扇状地先端部に比較して低調であった扇央部に立地する町域南部でも上林新庄遺跡群などでは次第に集落が発生し、周辺には上林古墳・末松古墳も築造される。更に７世紀後半にはこの地域の集落の規模が急激に拡大するとともに、石川県最古の寺院跡である末松廃寺が建立され、扇状地開発が大いに進んだことが明らかになっている。

古代には前時代に引き続き町域南部から中部にかけて上林新庄遺跡群や粟田遺跡・三納アラミヤ遺跡などで集落が展開する。また町域北西部の三日市Ａ遺跡ではこの時期の集落とともに古代北陸道が築造されている。

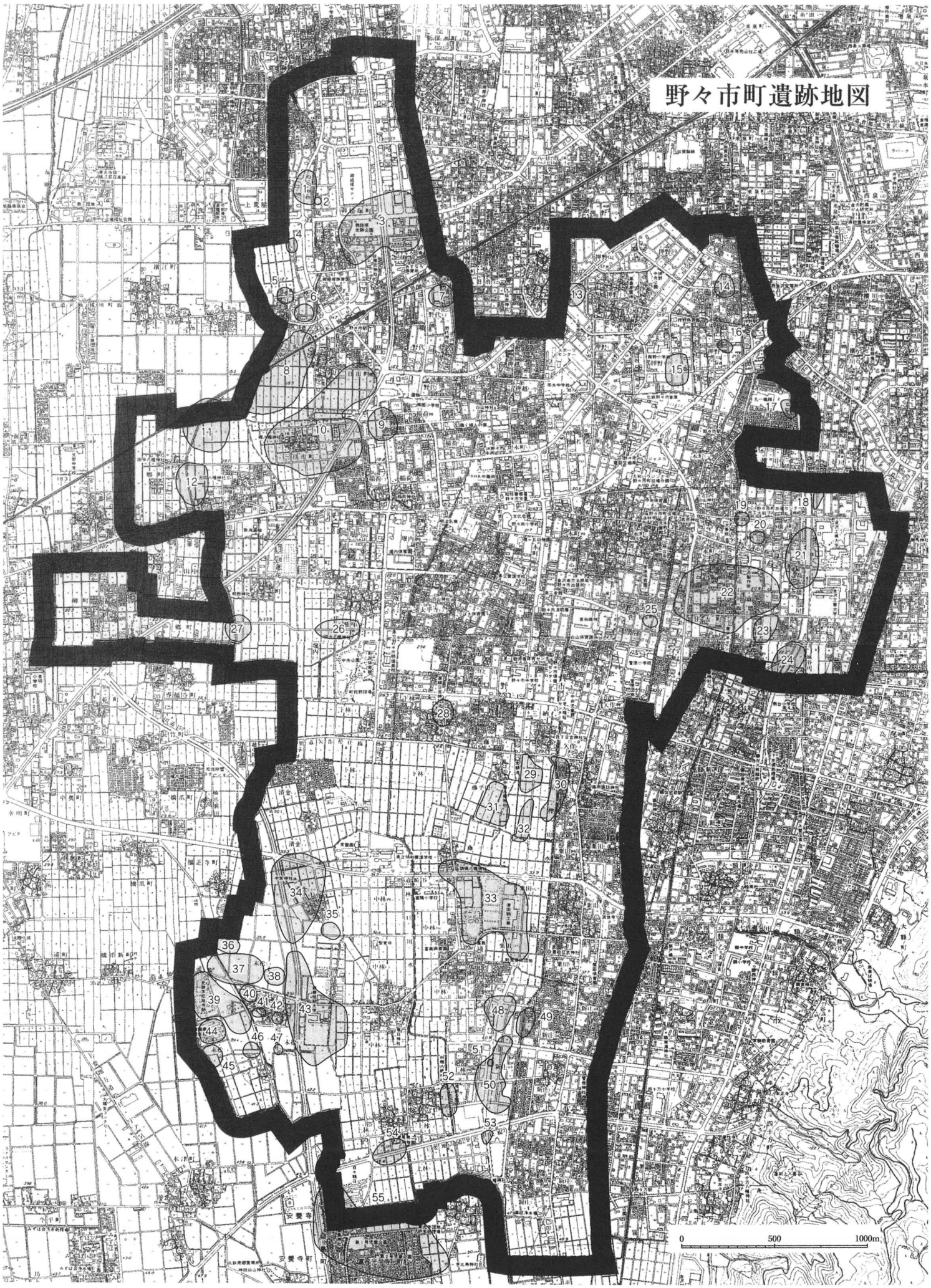
中世では林氏や富樫氏などの在地領主層によって扇状地とその周辺部で開発が行われる。野々市町東部の扇が丘ハワイゴク遺跡や扇が丘ゴショ遺跡では武士の居宅と見られる遺跡が検出されている。野々市町住吉町から扇が丘にかけては加賀国守護富樫氏の守護所である富樫館跡が所在する。この他粟田遺跡や三納ニシヨサ遺跡・三日市Ａ遺跡・徳用クヤダ遺跡・長池キタノハシ遺跡など町域の広い範囲で集落跡を確認している。

第３図　野々市町位置図
(S=1/3,000,000)

近世に入ると当時の野々市村は金沢近郊の農村として、また北陸街道沿いの宿駅として発展した。幕末には牛馬市が開かれ大正時代まで存続している。

近代以降は野々市村（大正 13 年からは野々市町）の役場が置かれ、昭和 30 年の合併によって誕生した新生野々市町の役場も平成 17 年の野々市町三納地内の役場移転までこの地に置かれていた。

1．御経塚シンデン遺跡　御経塚シンデン古墳群　2．御経塚経塚　3．御経塚遺跡　4．御経塚オッソ遺跡
5．長池ニシタンボ遺跡　6．長池キタノハシ遺跡　7．野代遺跡　8．二日市イシバチ遺跡
9．三日市ヒガシタンボ遺跡　10．三日市A遺跡　11．郷クボタ遺跡　12．徳用クヤダ遺跡　13．上宮寺跡
14．押野大塚遺跡　15．押野タチナカ遺跡　押野館跡　16．押野ウマワタリ遺跡　17．横川本町遺跡
18．高橋セボネ遺跡　19．山川館跡　20．高橋ウバガタ遺跡　21．扇が丘ゴショ遺跡　22．富樫館跡
23．扇が丘ヤグラダ遺跡　24．扇が丘ハワイゴク遺跡　25．菅原キツネヤブ遺跡　26．堀内館跡
27．田中ノダ遺跡　28．三林館跡　29．三納トヘイダゴシ遺跡　30．三納アラミヤ遺跡
31．藤平田ナカシンギジ遺跡　32．三納ニシヨサ遺跡　33．粟田遺跡　34．清金アガトウ遺跡
35．末松信濃館跡　36．末松福正寺遺跡　福正寺跡　37．末松ダイカン遺跡　38．末松B遺跡
39．末松廃寺跡　40．古元堂館跡　41．末松C遺跡　42．末松古墳　43．末松A遺跡　44．大館館跡
45．末松砦跡　46．法福寺跡　47．末松しりわん遺跡　48．下新庄アラチ遺跡　49．下新庄タナカダ遺跡
50．上林新庄遺跡　51．上林古墳　52．上林テラダ遺跡　53．上新庄ニシウラ遺跡　54．上林遺跡
55．安養寺遺跡




第４図　遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1/25,000）

# 第３章　　調査の成果

## 第１節　層序（第６図）

今次調査における調査区東側の基本的な層序は地表（田面）から耕作土と暗褐色土層の２層のみである。地表から地山面までは約 30cm と浅く、削平を受けているものと思われる。一方、調査区西側には南北に流れる河道跡があるため、地表から地山面までは約１ｍの深さがある。調査区西側の基本層序は地表から耕作土・床土・旧耕作土・旧床土・褐灰色粘質土層・灰褐色粘質土層・暗褐色砂質土（礫含む）層・暗褐色粘質土層・暗灰褐色粘質土層・黒色土層となっている。出土遺物は少ないが、近隣でこれまでに行われた発掘調査の状況を参照すると褐灰色粘質土から暗灰褐色粘質土が中世で、黒色土層は古代以前と考えられる。

## 第２節　遺構と遺物

今次調査では古代以前の土坑・河道跡と、中近世の掘立柱建物跡・土坑・小穴・河道跡・溝などの遺構を検出した。本報告では建物跡や遺物の出土した遺構を中心に柱穴列、土坑、小穴、河道、溝の順で説明する。なお説明にあたっては本文・図面図版・写真図版を用いる。また遺物については遺存状況のよいものを中心に収録した。説明は本文・遺物観察表・図面図版・写真図版を用いる。

### (1) 古代以前

**土坑 64**

**遺構**（第７図）調査区のほぼ中央に位置する。中近世の溝である 65 に切られている。形状は不定形で規模は 3.6m × １ｍ以上、深さは最深部で 16cm であるが土坑内は凹凸が多い。覆土は黄色土粒を含む明灰褐色土を主体とする。

**遺物**（第 10 図）１～ 11 は縄文土器で粗製の深鉢である。いずれも小片であり個体数は３個体前後である。１～７には外面に煤が付着する。

**河道跡**

**遺構**（第８・９図）河道跡は調査区西側に位置し、南北に流れる。東西にトレンチを入れて調査したところ、上層からは中近世遺物が若干出土したが、中･下層からはほとんど遺物が出土しなかった。堆積土層は基本的に褐色土（上層）・黒色粘土・暗灰色粘土・白灰色粘土（中層）・黒色土（下層）の順である。

本項では中・下層部分について報告し、上層部分については次項で報告する。河道跡は確認できた長さが約 32m、幅は河道西側がやや調査区外に伸びているようであり全幅は分からないが確認できた幅は約 10m である。東側は溝 65 に切られている。深さは確認面から最深部で約 150cm を測る。中層からは遺物は出土せず､下層からは打製石斧（32）と弥生土器甕（33）が出土したのみである。中･下層では覆土がレンズ状に堆積しており長時間かけて自然に埋まっていったものと思われる。

**遺物**（第 11 図）32 は打製石斧である。握部は欠損している。33 は法仏式の甕である。外面に煤が付着する。

### (2) 中近世

**柱穴列**

**遺構**（第７図）調査区北側に位置する。柱穴 23・25・31 から構成され、東西２間を確認した。東

西の柱間は108cm・116cmである。柱穴は円形乃至楕円形で径は28～36cm、深さは8～20cmを測る。覆土は暗褐色土である。柱痕は確認できなかった。軸はN17°Eである。時期は出土遺物はないが覆土から中世と判断する。溝39とは重なる位置関係にあるが前後関係は不明である。

**土坑21**

**遺構**（第7図）調査区中央の南側に位置する。歪な楕円形で規模は168×100cm、深さは中央の最深部が32cm、周囲は約20cmを測る。覆土は灰褐色土・暗褐色土を主とする。出土遺物はないが覆土より中世の遺構と判断する。

**小穴6**

**遺構**（第7図）調査区ほぼ中央の北側で土坑64の北に位置する。歪な楕円形で規模は50×32cm、深さは中央の最深部が26cmを測る。覆土は暗褐褐色土・淡暗褐色土である。出土遺物はないが覆土より中世の遺構と判断する。

**小穴51**

**遺構**（第7図）調査区東側に位置する。楕円形で、規模は50×38cm、深さは23cmを測る。覆土は暗褐褐色土・明褐色土である。出土遺物はないが覆土より中世の遺構と判断する。

**河道跡**

**遺構**（第8・9図）前項で記述した河道跡の上層部分である。深さは確認面から約60cmである。覆土はほぼ褐色土の単層であり、埋め戻されたものと思われる。

**遺物**（第10・11・12図）出土遺物は14・15世紀代を主とする。16～22は中世土師器皿である。18～22は煤が付着している。24は瀬戸の天目茶碗、26は瀬戸縁釉小皿、27は瀬戸卸目付大皿である28・29は中国青磁碗である。28は外面口縁付近に雷文帯がある。30は砥石である。31は中国白磁皿で内面底部に目跡が残る。34は珠洲片口鉢で内面口縁に波状文がある。35は肥前磁器碗で18世紀のものである。

**溝39**

**遺構**（第9図）調査区北東隅に位置する。ほぼ東西に流れる。調査区外に伸びているため長さ・幅とも不明だが、確認できた規模は長さ約6m、幅40cmである。覆土は暗褐色土と黒褐色土を主とする。出土遺物は越前甕（12）のほか図示してはいないが中世土師器皿の小片と炉石の小片である。遺構の時期は中世であるが、前述の掘立柱建物との前後関係は不明である。

**遺物**（第10図）12は越前の甕である。外面には自然釉がかかりへら記号が見える。

**溝65**

**遺構**（第8・9図）調査区西側で河道跡と重複し、南北に流れる。土層断面図の11・12・14～20にあたる。確認した長さは約17m、幅は約5mである。土層断面の観察から、河道跡が埋まった後に掘削されている。中世末期～近世にかけての遺構である。

**遺物**（第12・13図）出土遺物は16～18世紀前半を主とする。37は土師器皿で薄手で体部は開き気味である。38は越前甕の底部である。40は瀬戸の碗、41は瀬戸卸目付大皿、42は瀬戸折縁皿である。43は中国青磁碗で内面底部に印花文がる。47は銭貨である。磨耗のため判読はできない。51は肥前磁器碗で時期は18世紀前半である。53は行火の底部である。このほか図化はしなかったが近世陶磁器が定量出土している。

# 第4章　総　括

**縄文時代**

縄文時代では、土坑や河道が検出されており縄文土器が出土している。これまでに実施された近隣の調査でも縄文土器や打製石斧・土偶などが出土しており、この時代の人々の活動の跡を窺うことができる。

**中世**

今次調査区は中世加賀の守護所である富樫館跡推定地の南東40ｍに位置する。調査区の東側では、北端部分で柱穴列・溝39が検出され、また全域から小穴が点在する状況を確認した。

ここでは耕土直下に遺構確認面があり、包含層の堆積は確認されなかったことから、後世の削平を受けていると考えられ、当時の様相を知ることは難しい。検出された柱穴列は柵列ないし掘立柱建物と考えられ、また溝39からは、越前甕や土師器Ⅲなどが出土している。過去に近隣で実施したミヤジ地区の調査（第１図⑩・⑪－Ａ・⑪－Ｂ）では掘立柱建物などが検出されていることから［野々市町2003］、今次調査区についても何らかの土地利用がされていたと考えられる。

調査区西側では南北に流れる河道を検出している。河道からの出土遺物は14・15世紀を中心としており、この時期までは流路として機能していたことが確認された。その後河道は埋められ、東側に改めて溝65が掘削されている。溝65は出土遺物から18世紀前半までは存在していたようだが、その後埋まっており、大正３年（1914年）に作図された「野々市町字本町宅地見取図」（註１）でも該当箇所に痕跡は残っていない。

（註１）「野々市町字本町宅地見取図」（野々市町税務課所蔵）は『冨樫館跡　蝮土居地区　冨樫館跡　鬼ヶ窪地区』や『富樫館跡Ⅲ』で用いた明治22年の「野々市村地籍図」とは、今次調査区部分の地割について違いがないため、本報告ではこれを用いた。なお、野々市町の町制施行は大正13年（1924年）で、この図が作図された大正３年当時は野々市村であり、この図のタイトルは町制施行後につけられたものである。

**《参考文献》**

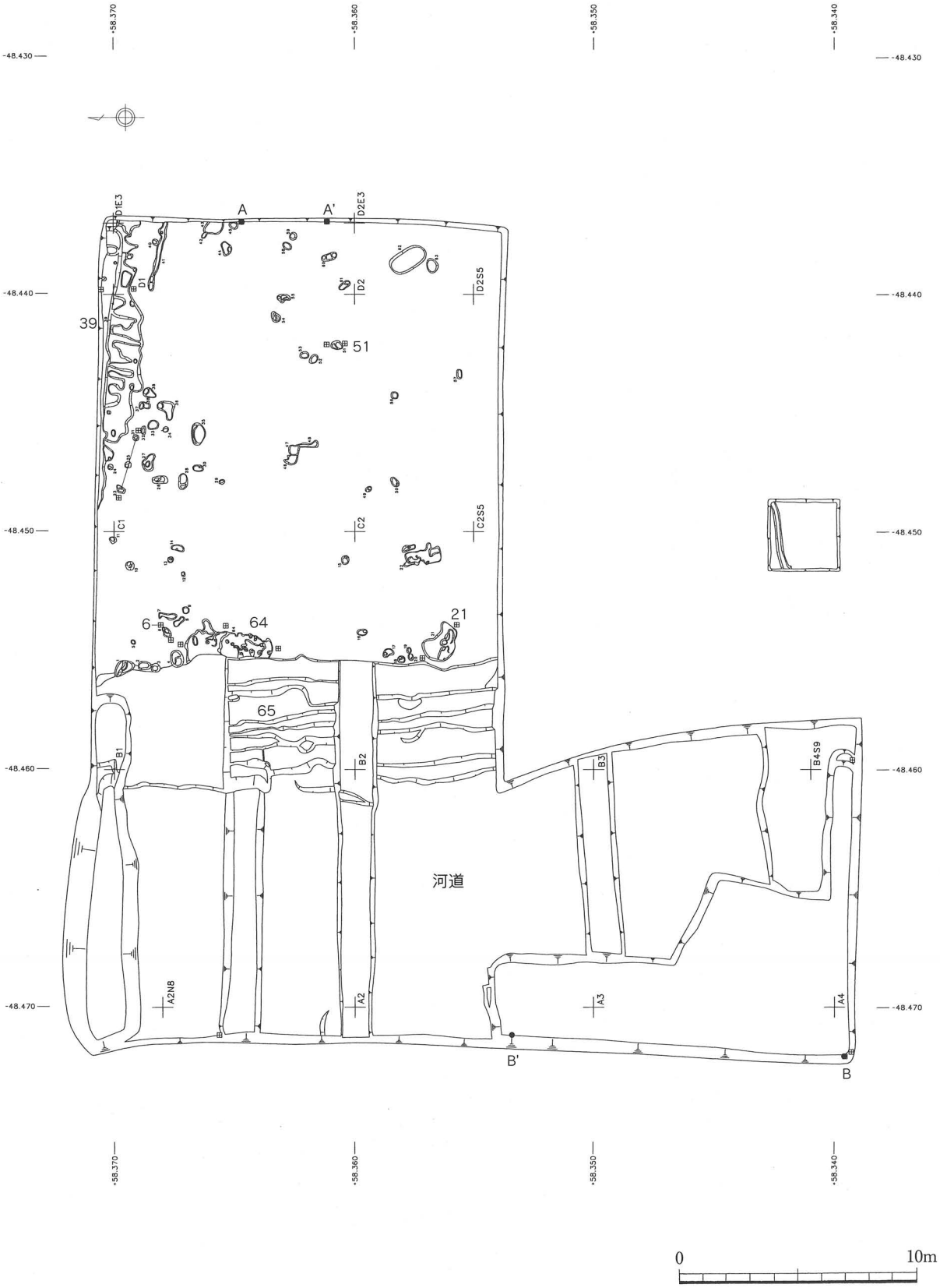

野々市町教育委員会　2001　『冨樫館跡　蝮土居地区　冨樫館跡　鬼ヶ窪地区』
野々市町教育委員会　2003　『富樫館跡Ⅲ』
野々市町教育委員会　2007　『富樫館跡Ⅳ』
野々市町史専門委員会　2003　『野々市町史　資料編１』　石川県野々市町
野々市町史専門委員会　2006　『野々市町史　通史編』　石川県野々市町
北陸中世土器研究会　1997　『中・近世の北陸』　桂書房

## 遺物観察表

| 報告番号 | 実測番号 | 出土地点 | №ほか | 種類 | 器種 | 口径(mm) | 器高(mm) | 底径(mm) | 残存率 | 色調 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 64-1 | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | 310 | | | 1/12 | 外：褐灰 | 内：にぶい黄褐 | |
| 2 | 64-2 | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：褐灰 | 内：にぶい黄褐 | |
| 3 | 64-a | 土坑 64 | | 縄文土器 | 浅鉢 | | | | 小片 | 外：褐灰 | 内：褐灰 | |
| 4 | 64-b | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：灰黄 | 内：褐灰 | |
| 5 | 64-c | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：黒褐 | 内：にぶい黄褐 | |
| 6 | 43-1 | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：褐灰 | 内：にぶい黄橙 | |
| 7 | 41-2 | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：黒褐 | 内：にぶい黄橙 | |
| 8 | 41-2 | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：にぶい黄橙 | 内：灰黄褐 | |
| 9 | 41-2 | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：灰黄褐 | 内：にぶい黄橙 | |
| 10 | 43 | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：にぶい黄橙 | 内：灰黄褐 | |
| 11 | 43 | 土坑 64 | | 縄文土器 | 深鉢 | | | | 小片 | 外：にぶい黄橙 | 内：にぶい黄褐 | |
| 12 | 27 | 39 | | 陶器 | 甕 | | | | 小片 | 外：灰オリーブ | 内：灰褐 | 越前 |
| 13 | 35 | 河道上層 | A１グリッド | 陶器 | 皿 | 118 | | | 1/6 | 釉：灰釉 | 胎：灰白 | 瀬戸 |
| 14 | 34 | 河道上層 | A１グリッド | 陶器 | 皿 | 246 | | | 1/12 | 釉：灰釉 | 胎：にぶい黄 | 瀬戸 |
| 15 | 45 | 河道上層 | A１グリッド | 石製品 | | 227 | 180 | 91 | | | | 2370g |
| 16 | 15 | 河道上層 | A２グリッド | 中世土師器 | 皿 | 59 | 22 | | 1/4 | 外：にぶい黄橙 | 内：にぶい黄橙 | |
| 17 | 39 | 河道上層 | A２グリッド | 中世土師器 | 皿 | 67 | | | 1/12 | 外：灰白 | 内：灰白 | |
| 18 | 38 | 河道上層 | A２グリッド | 中世土師器 | 皿 | 90 | | | 1/10 | 外：浅黄橙 | 内：黒 | 油煤痕 |
| 19 | 37 | 河道上層 | A２グリッド | 中世土師器 | 皿 | 81 | 19 | | 1/3 | 外：灰白 | 内：黒 | 油煤痕 |
| 20 | 8 | 河道上層 | A２グリッド | 中世土師器 | 皿 | 80 | | | 1/6 | 外：にぶい橙 | 内：黒褐 | 油煤痕 |
| 21 | 2 | 河道上層 | A２グリッド | 中世土師器 | 皿 | 103 | | | 1/12 | 外：浅黄橙 | 内：黒 | 油煤痕 |
| 22 | 3 | 河道上層 | A２グリッド | 中世土師器 | 皿 | 83 | | | 1/10 | 外：にぶい橙 | 内：にぶい橙 | 油煤痕 |
| 23 | 11 | 河道上層 | A２グリッド | 陶器 | 甕 | | | | 小片 | 外：にぶい赤褐 | 内：にぶい赤褐 | 越前 |
| 24 | 5 | 河道上層 | A２グリッド | 陶器 | 碗 | 112 | | | 1/12 | 釉：鉄釉 | 胎：褐 | 瀬戸　天目碗 |
| 25 | 10 | 河道上層 | A２グリッド | 陶器 | 碗 | | | 46 | 1/2 | 外：灰白 | 内：灰オリーブ | 瀬戸 |
| 26 | 6 | 河道上層 | A２グリッド | 陶器 | 皿 | 106 | | | 1/8 | 釉：灰釉 | 胎：灰白 | 瀬戸　緑釉小皿 |
| 27 | 9 | 河道上層 | A２グリッド | 陶器 | 皿 | (210) | | | 小片 | 釉：灰釉 | 胎：オリーブ黄 | 瀬戸　卸目付大皿 |
| 28 | 4 | 河道上層 | A２グリッド | 磁器 | 碗 | (126) | | | 小片 | 釉：青磁釉 | 胎：オリーブ灰 | 中国青磁 |
| 29 | 16 | 河道上層 | A２グリッド | 磁器 | 碗 | | | 56 | 1/4 | 釉：青磁釉 | 胎：オリーブ灰 | 中国青磁 |
| 30 | 17 | 河道上層 | A２グリッド | 石製品 | 砥石 | (48) | (38) | (20) | | | | 48.1g |
| 31 | 7 | 河道上層 | A３グリッド | 磁器 | 皿 | 96 | 24 | 47 | 1/5 | 釉：透明釉 | 胎：灰白 | 中国白磁 |
| 32 | 29 | 河道トレンチ | 下層 | 石器 | 打製石斧 | (105) | (87) | (31) | | | | 451g　石英安山岩 |
| 33 | 36 | 河道トレンチ | 下層 | 弥生土器 | 甕 | 190 | | | 1/10 | 外：浅黄橙 | 内：浅黄橙 | |
| 34 | 28 | 河道トレンチ | 上層 | 陶器 | 片口鉢 | (290) | | | 小片 | 外：黄灰 | 内：黄灰 | 珠洲 |
| 35 | 33 | 河道トレンチ | 上層 | 磁器 | 碗 | (90) | | | 小片 | 釉：透明釉 | 胎：灰白 | 肥前　18 世紀 |
| 36 | 1 | 溝 65 | B１グリッド | 須恵器 | 瓶類 | | | 125 | 1/6 | 外：灰 | 内：灰オリーブ | |
| 37 | 31 | 溝 65 | B１グリッド | 中世土師器 | 皿 | 107 | 24 | | 1/7 | 外：灰白 | 内：灰白 | |
| 38 | 22 | 溝 65 | B１グリッド | 陶器 | 甕 | | | 143 | 1/8 | 外：にぶい赤褐 | 内：灰褐 | 越前 |
| 39 | 21 | 溝 65 | B１グリッド | 陶器 | 片口鉢 | | | 114 | 1/4 | 外：灰 | 内：灰 | 珠洲 |
| 40 | 32 | 溝 65 | B１グリッド | 陶器 | 碗 | | | 53 | 1/4 | 釉：灰釉 | 胎：灰白 | 瀬戸 |
| 41 | 12 | 溝 65 | B１グリッド | 陶器 | 皿 | (245) | | | 小片 | 釉：灰釉 | 胎：浅黄 | 瀬戸　卸目付大皿 |
| 42 | 13 | 溝 65 | B１グリッド | 陶器 | 皿 | (128) | | | 小片 | 釉：灰釉 | 胎：灰黄 | 瀬戸　折縁皿 |
| 43 | 23 | 溝 65 | B１グリッド | 中国青磁 | 碗 | | | 58 | 1/3 | 釉：青磁釉 | 胎：オリーブ黄 | 中国青磁　印花文 |
| 44 | 14 | 溝 65 | B１グリッド | 中国白磁 | 皿 | | | 27 | 底部完 | 釉：透明釉 | 胎：灰白 | 中国白磁 |
| 45 | 25 | 溝 65 | B１グリッド | 石製品 | 砥石 | (72) | (55) | (37) | | | | 138.5g |
| 46 | 24 | 溝 65 | B１グリッド | 石製品 | 砥石 | (35) | (30) | (8) | | | | 15.6g |
| 47 | 46 | 溝 65 | B１グリッド | 金属製品 | 銭貨 | 23 | | | | | | 2.6g |
| 48 | 26 | 溝 65 | B１グリッド | | 鉄滓 | (69) | (55) | (25) | | | | 136.9 g |
| 49 | 19 | 溝 65 | B２グリッド | 陶器 | 甕 | | | | 小片 | 外：灰 | 内：灰 | 珠洲 |
| 50 | 18 | 溝 65 | B１グリッド | 陶器 | 碗 | 144 | | | 1/12 | 釉：灰釉 | 胎：灰白 | 瀬戸 |
| 51 | 40 | 溝 65 | B２グリッド | 磁器 | 碗 | | | 42 | 底部完 | 釉：透明釉 | 胎：灰白 | 肥前　18 世紀 |
| 52 | 20 | 溝 65 | B２グリッド | 土製品 | フイゴ羽口 | 61 | 30 | | | 外：灰 | 内：にぶい赤褐 | 外径 61mm　内径 30mm |
| 53 | 30 | 溝 65 | B２グリッド | 石製品 | 行火 | (117) | (88) | (54) | | | | 535g　軽石凝灰岩 |

なお陶磁器の分類・時期については下記の文献による。

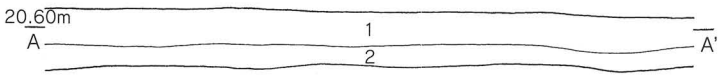

珠洲焼　吉岡康暢　1994 『中世須恵器の研究』
越前焼　岩田　隆　1997 「越前」『中近世の北陸－考古学が語る社会史』
瀬戸焼　藤澤良祐　1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』
青磁　上田秀夫　1982 「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究№２』
白磁　森田　勉　1982 「14～16 世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究№２』
肥前　九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』




第５図　富樫館跡全体遺構図（S=1/250）

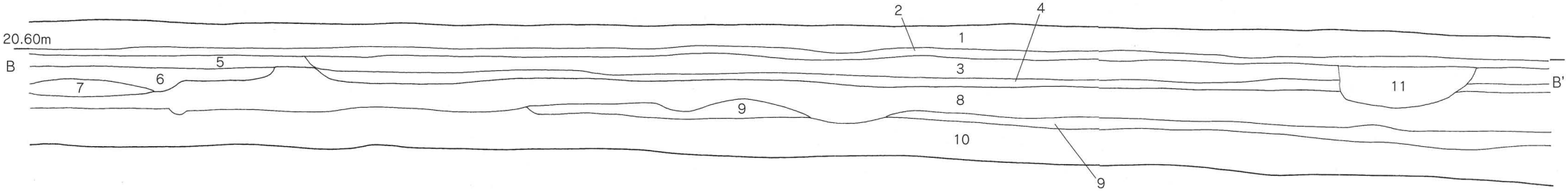
## 第６図　調査区東壁断面・西壁断面（S=1/40）

調査区東壁

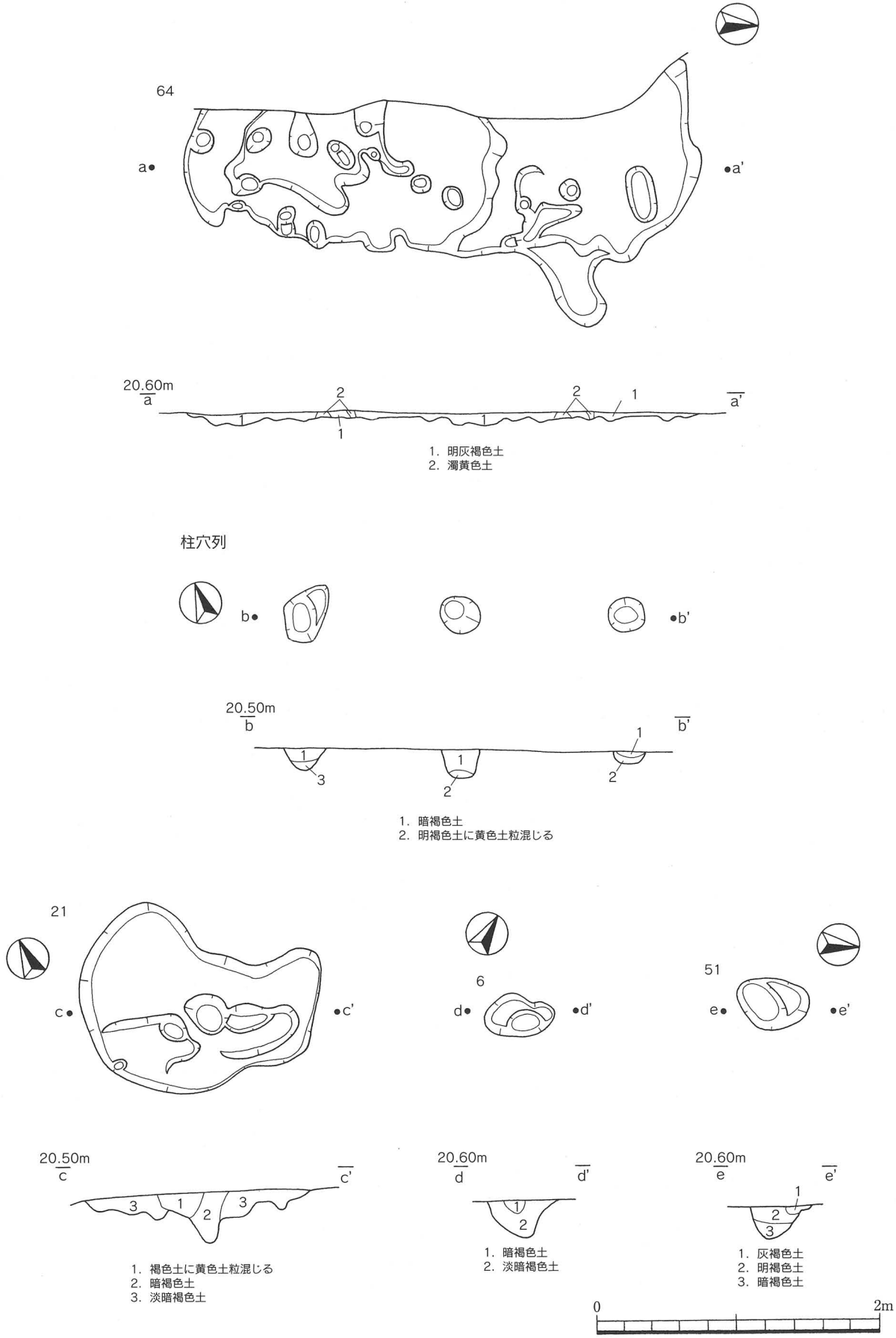



1．耕土
2．暗褐色土

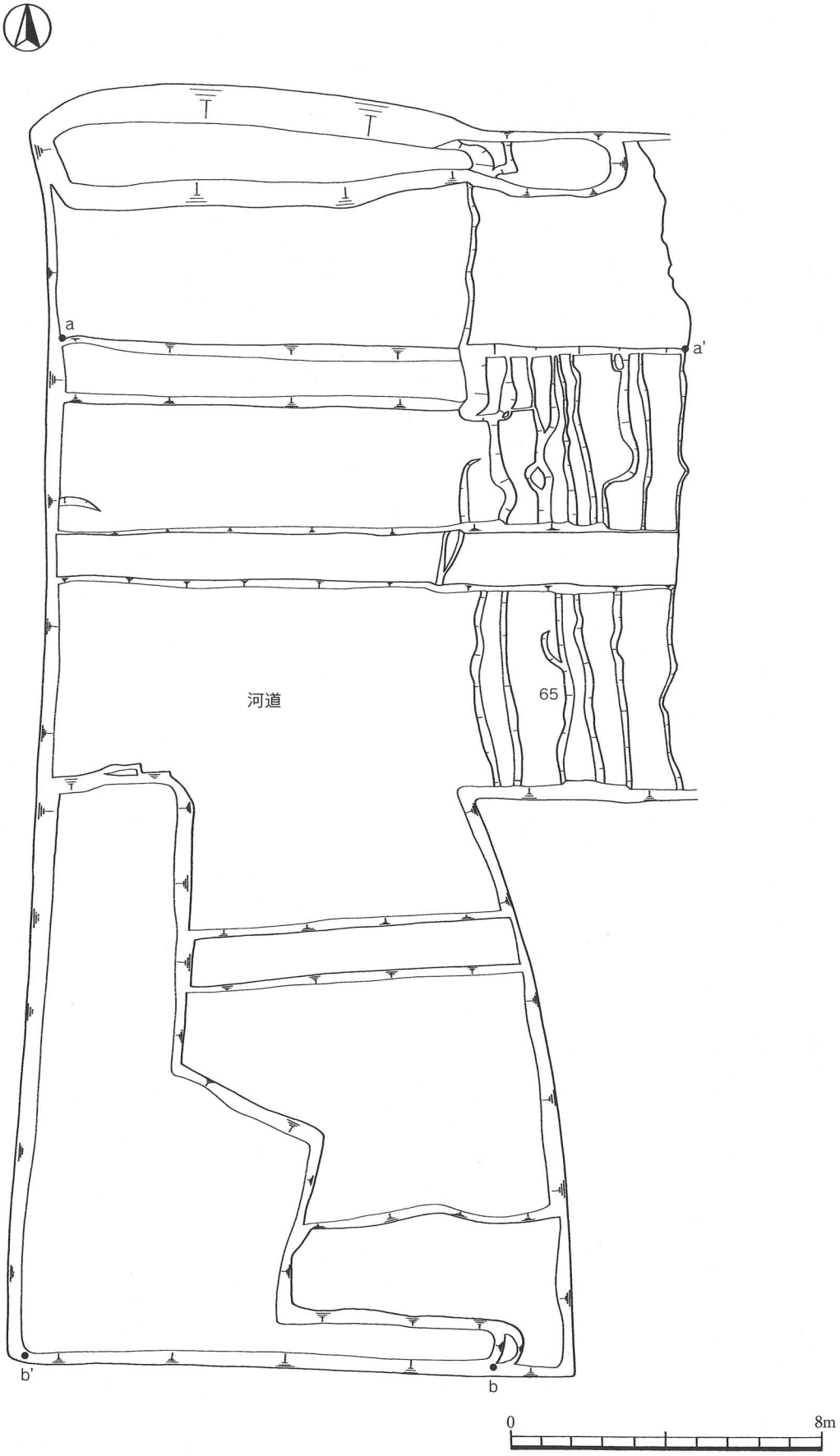
調査区西壁



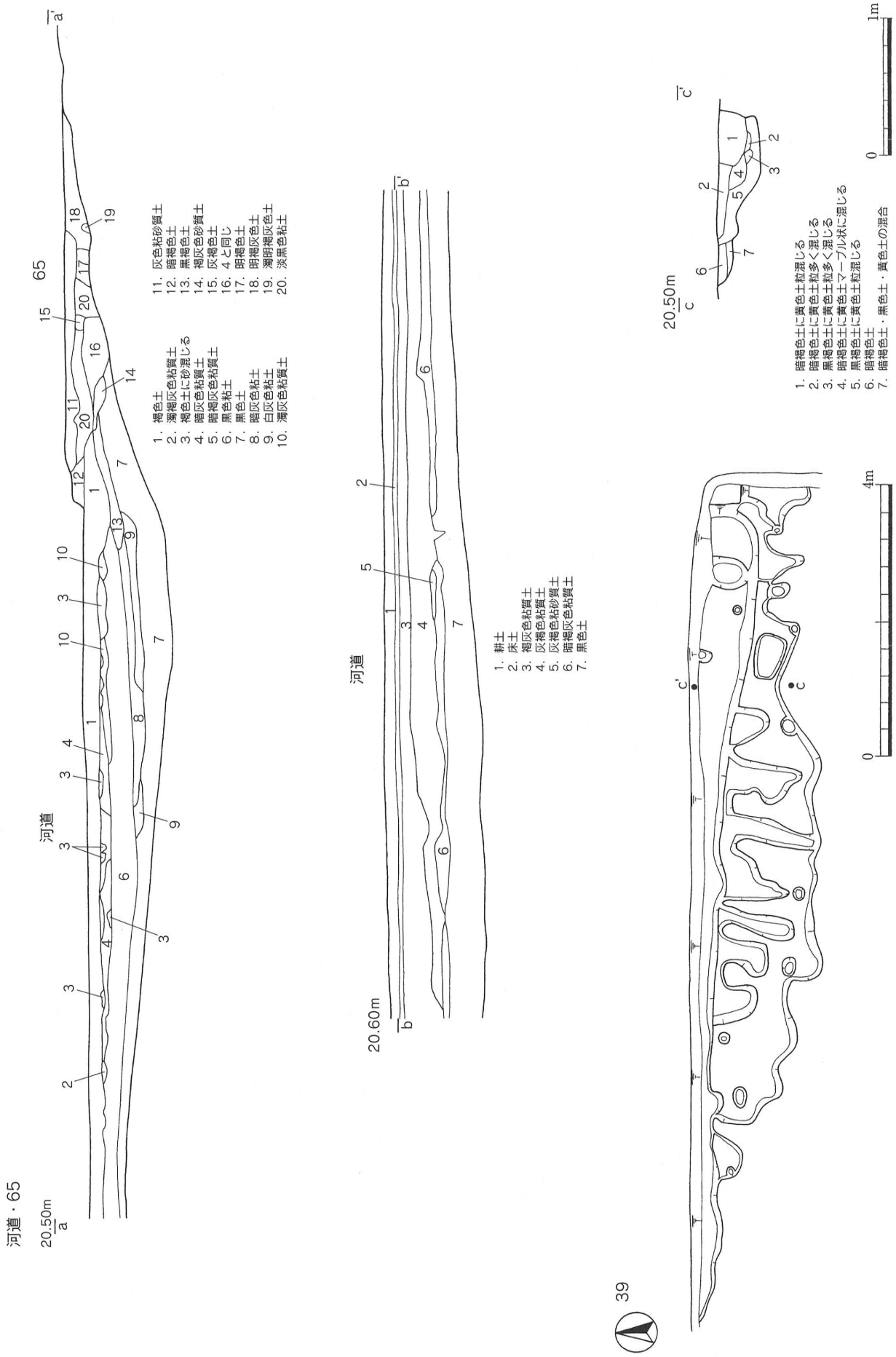

1．耕土
2．床土
3．旧耕土
4．旧床土
5．褐灰色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．暗灰色砂質土に礫含む
8．暗褐灰褐色粘質土
9．暗灰褐色粘質土
10．黒色土
11．茶褐色土に礫混じる（旧用水）



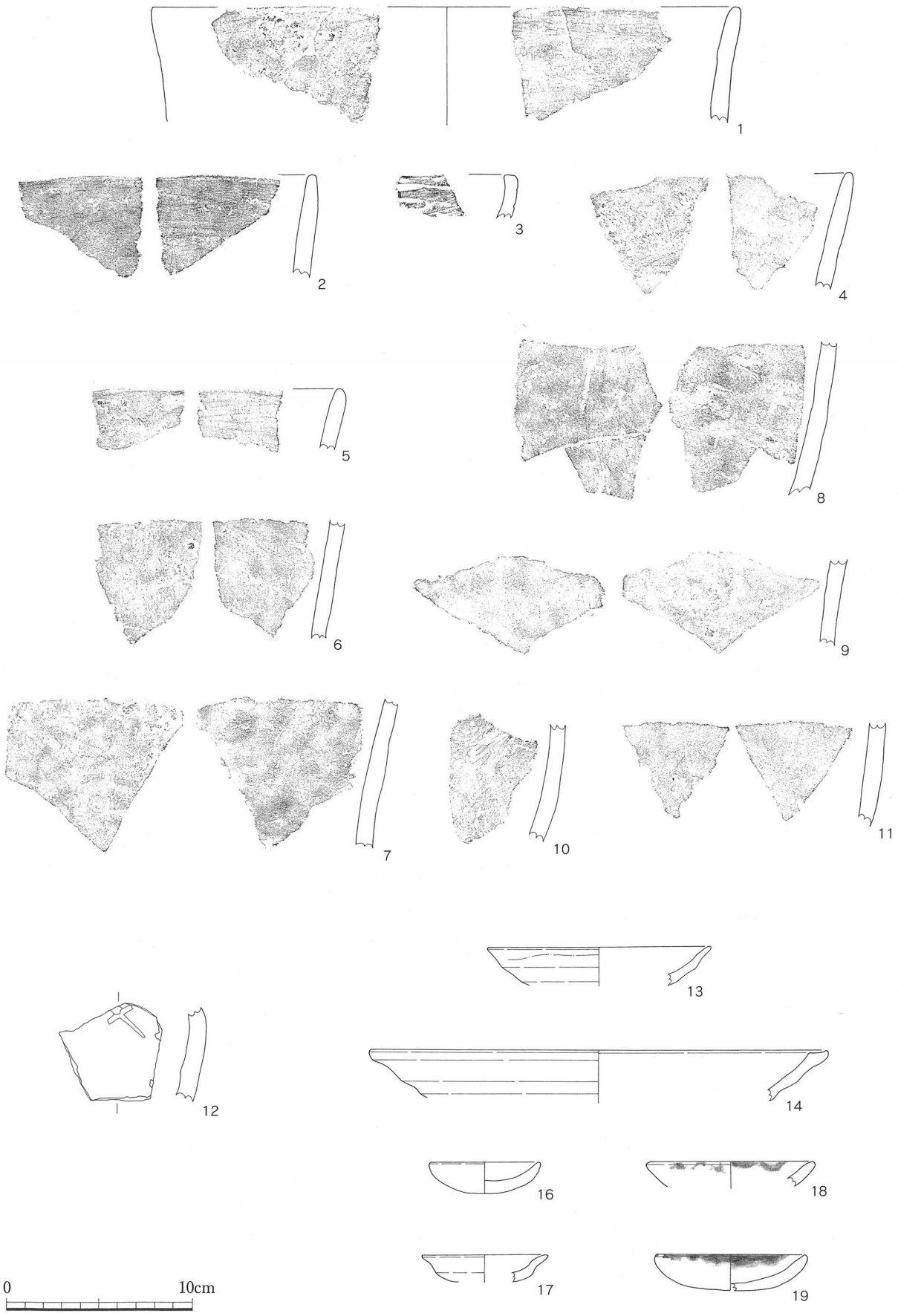

**第７図　遺構実測図　土坑64、柱穴列、土坑21、小穴6、51（S=1/40）**



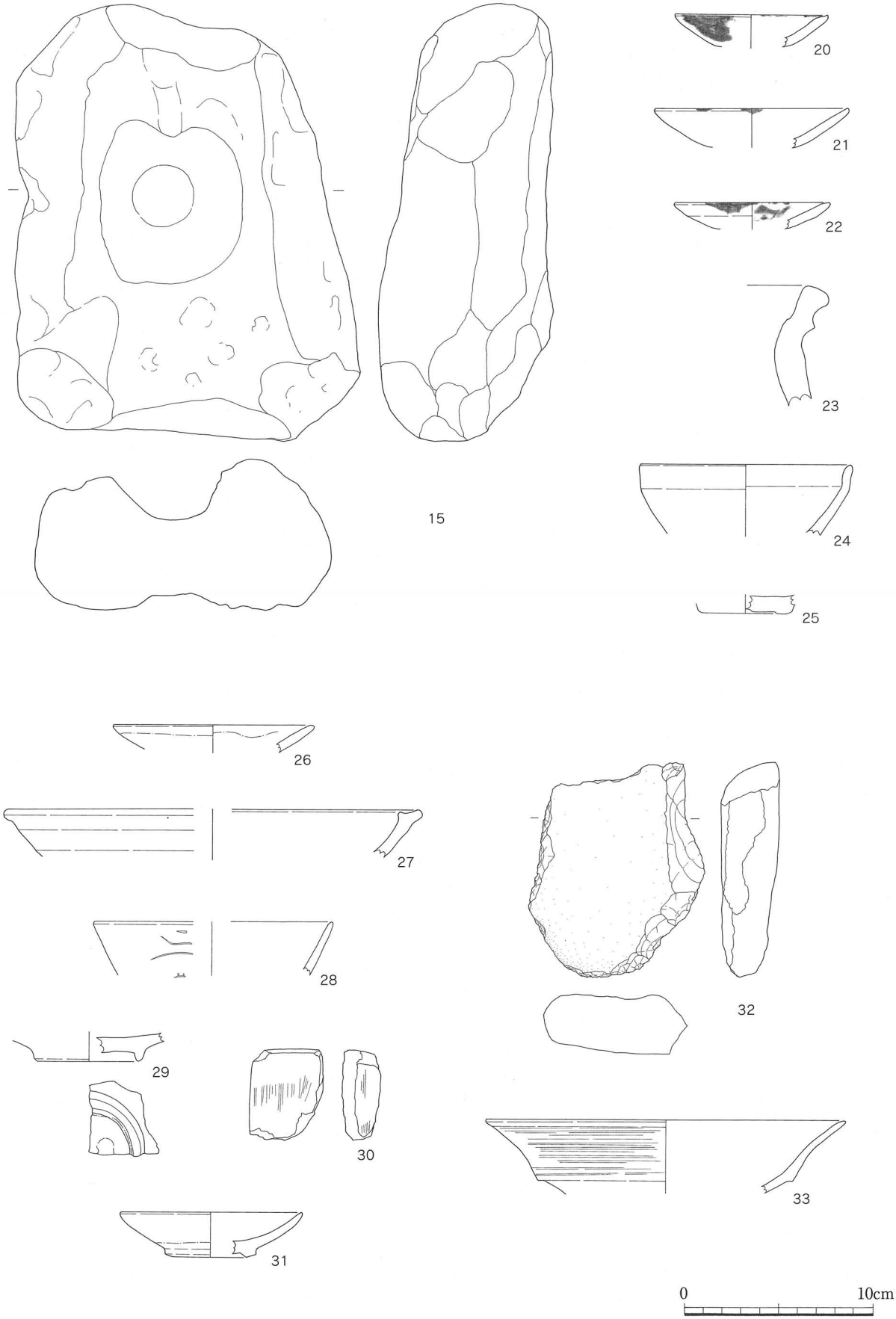

第８図　遺構実測図　河道、溝 65（S=1/160）



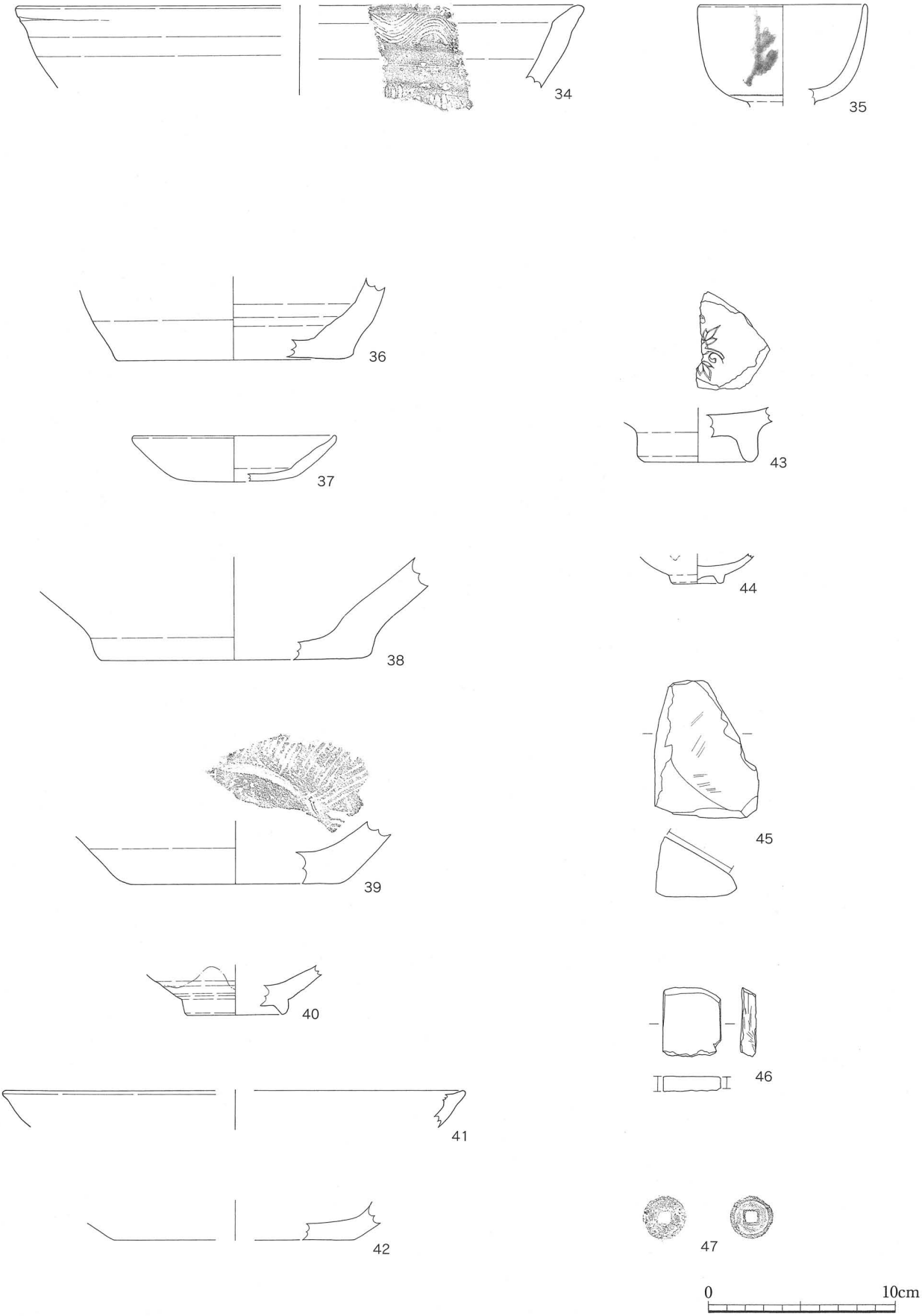

**第９図　遺構実測図　河道、溝 65（S=1/80）、溝 39（S=1/80、1/40）**



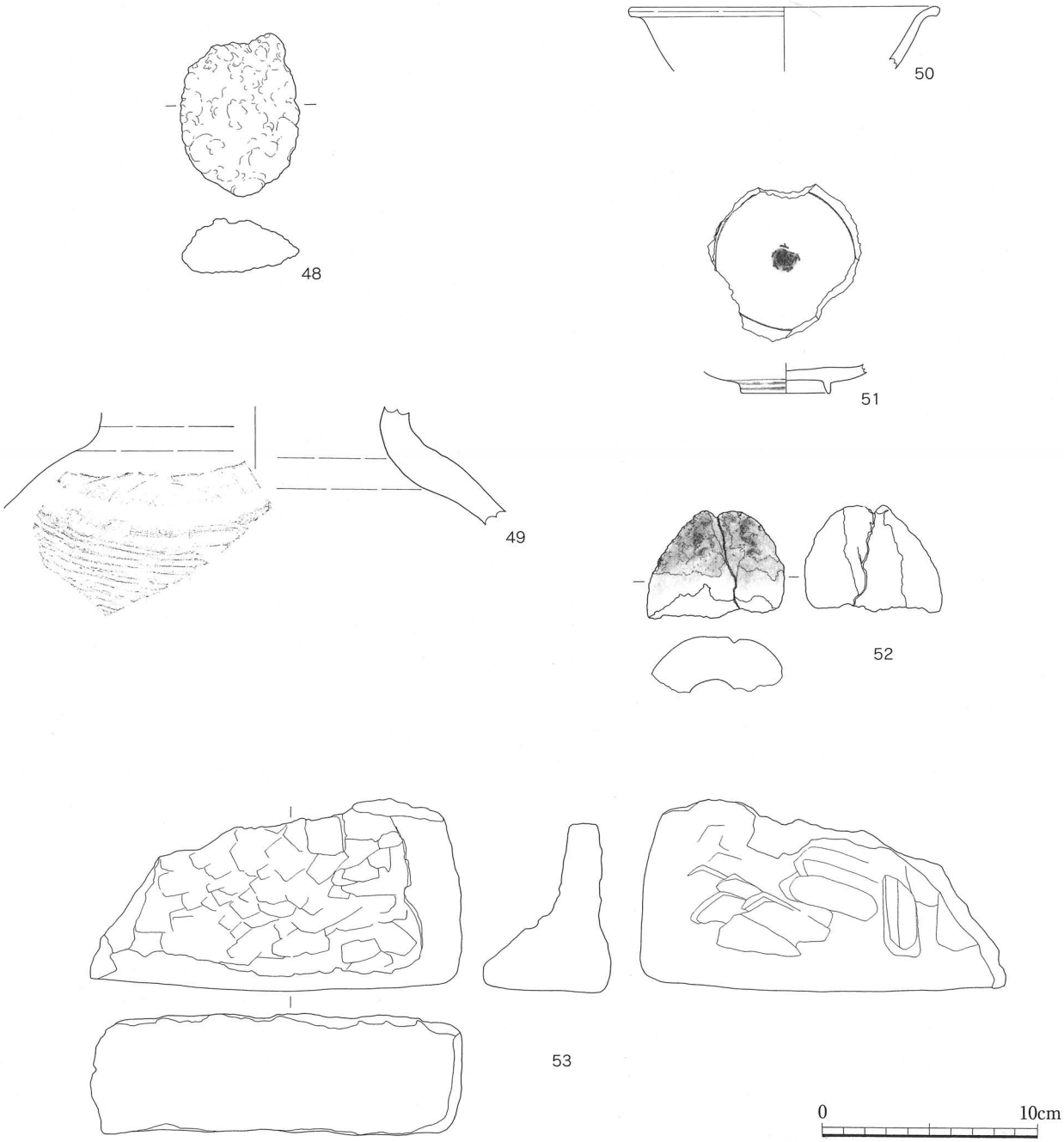

第10図　64（1～11）39（12）　河道A1グリッド（13・14・16～19）出土遺物（S=1/3）




第11図　河道A1グリッド（15）A2グリッド（20～33）出土遺物（S=1/3）



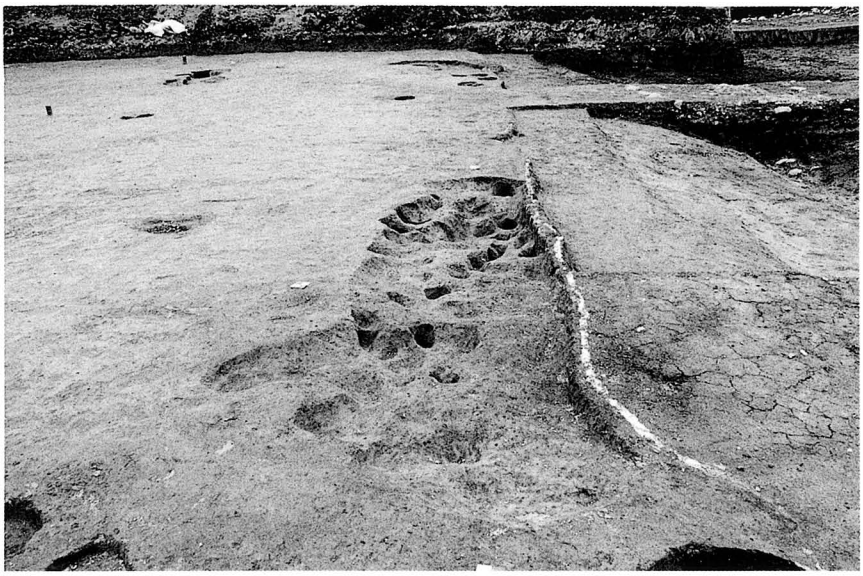

第12図　河道トレンチ（34・35）65（36～47）出土遺物（S=1/3）




第13図　65（48～53）出土遺物（S=1/3）

調査区東側完掘（南から）

調査区西側完掘（南から）



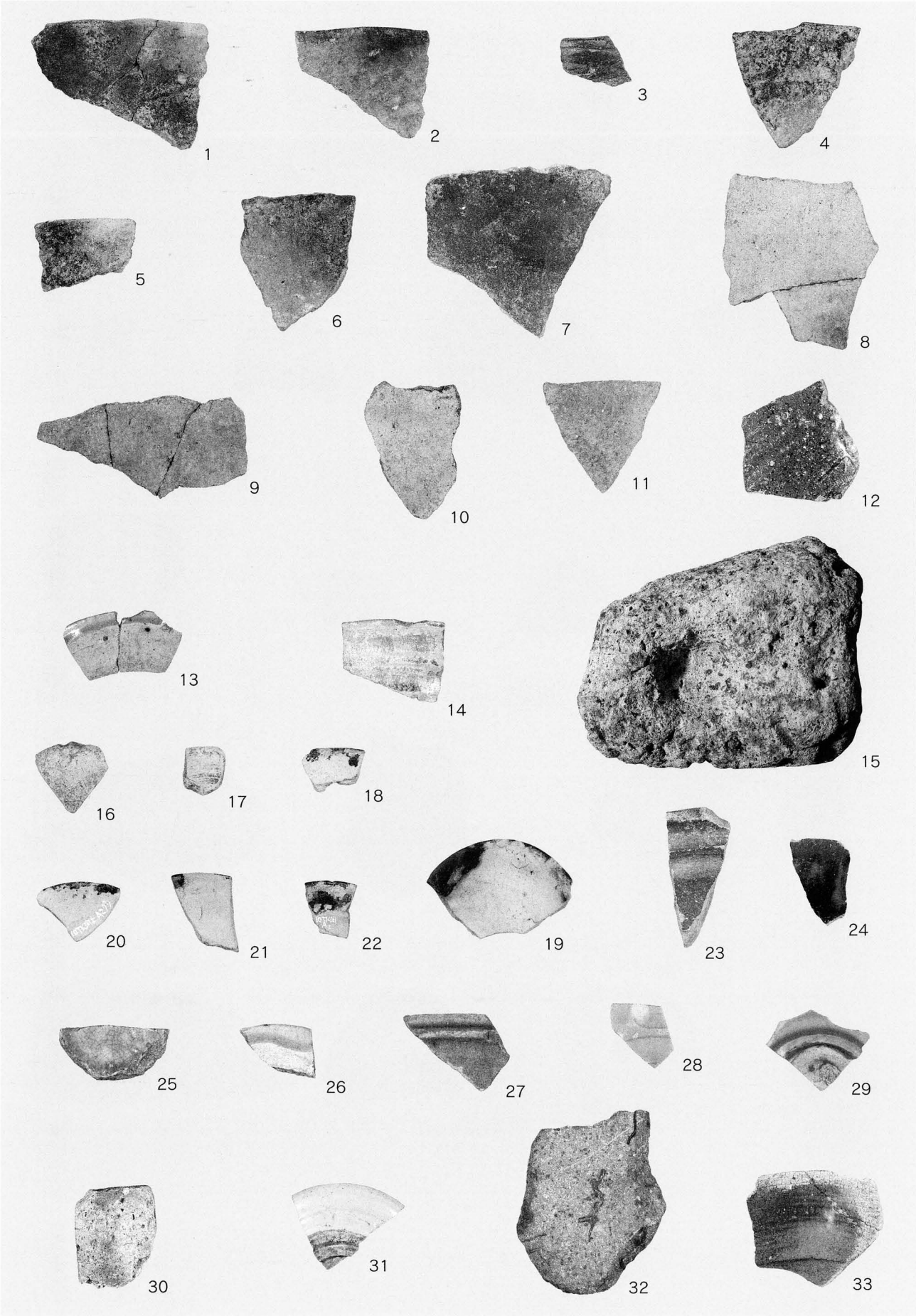
土坑64完掘（北から）

写真図版2

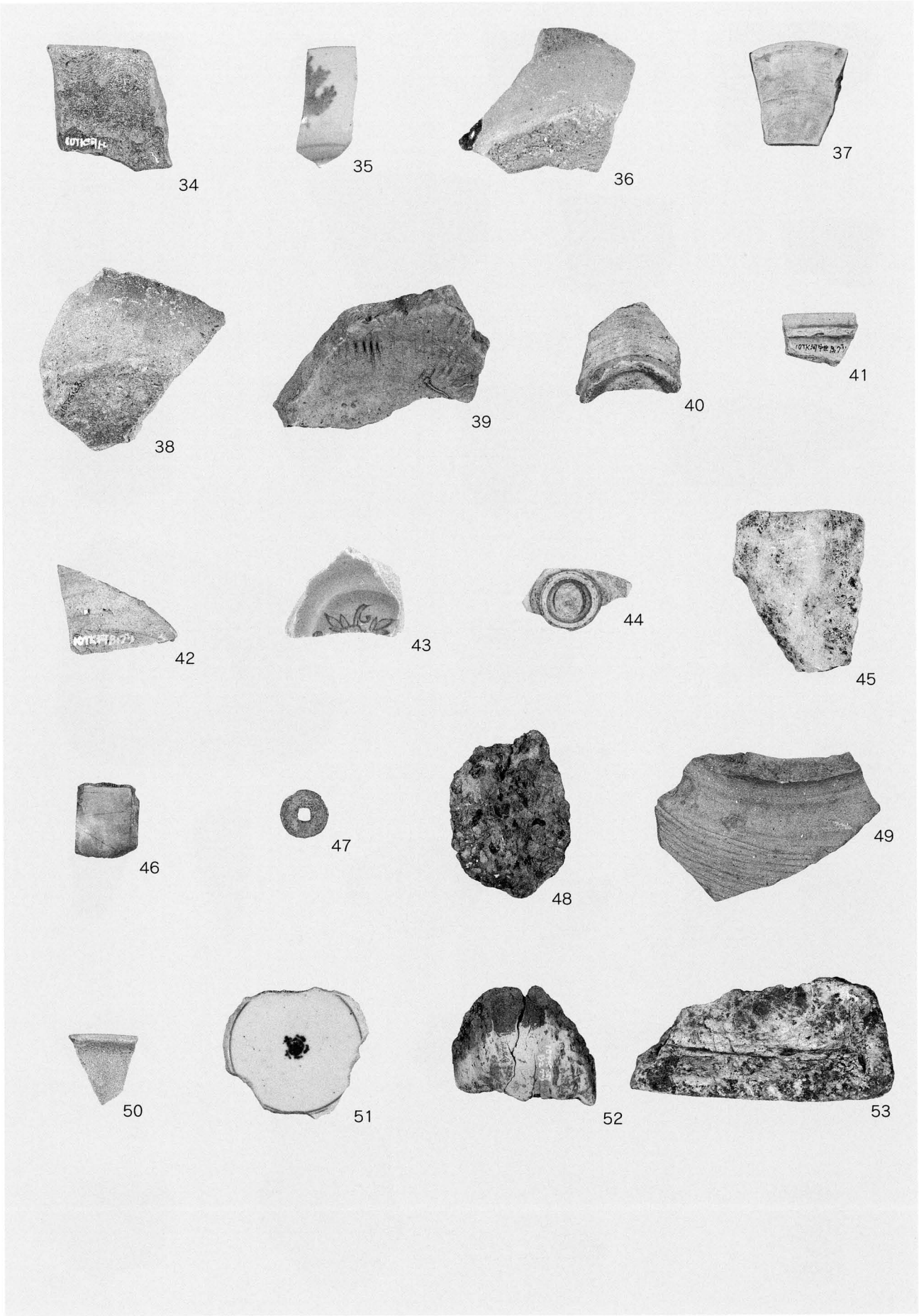
掘立柱建物完掘（東から）

溝3P完掘（東から）

河道トレンチ（南から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
20
21
22
19
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

写真図版 4



# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | とがしかんせき |
| 書名 | 富樫館跡 |
| 副書名 | 和光保育園建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | V |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 永野　勝章 |
| 編集機関 | 野々市町教育委員会 |
| 所在地 | 〒921－8510　石川県石川郡野々市町三納18街区1　　Tel：076－227－6122 |
| 発行機関 | 野々市町教育委員会 |
| 発行年月日 | 西暦　2011年3月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 富樫館跡 | 野々市町　扇が丘 | 17344 | 16039 | 36°31′41″ | 136°37′21″ | 20100506～20100618 | 797㎡ | 記録保存調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 富樫館跡 | 館跡 | 縄文、中世、近世 | 柱穴列、土坑、小穴、溝 | 土器、陶磁器、石製品 | |

| | |
|---|---|
| 要約 | 縄文時代の遺構・遺物が検出され、中世の館跡周辺にあたる地点を検出した。調査区は後世の削平を受けていると考えられるが、北東端部分から中世の柱穴列や溝が検出されており、何らかの土地利用がされていたと考えられる。西側では南北に流れる河道を検出している。河道は縄文時代から中世後期まで存在しており、その後埋められた後に、その東側に新たに溝が掘削されている。この溝も18世紀代には埋まったと考えられ、近代にはその痕跡を残していない。 |

和光保育園建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

富樫館跡Ⅴ

発行日　平成23年3月31日
発行者　野々市町教育委員会
〒921－8510
石川県石川郡野々市町字三納18街区1
電話　076－227－6122
印　刷　（株）画遊